

は玉泉寺、淺野川口は本願寺末寺に於て粥施行被仰付。と見ゆ、菅家見聞集に、延寶五年陽廣公三十三回忌金澤天徳院に而法會御執行、三月三日、五日公御參詣。金澤兩口に於て貧人へ施行米被下、三日、四日、五日、三ヶ日被行之。とあり。又改作所舊記に、元祿十一年三月高德公御年忌に付、玉泉寺並東本願寺末寺に而施行米被下處、石川郡上野新村百姓八右衛門せがれ四郎儀は玉泉寺へ、同郡諸江村百姓七郎右衛門せがれ八右衛門は東末寺へ施行米請に罷越處、兩人共未だ幼少に付、門外に而人被押相果てたるよし見ゆたり。泰雲公年譜に、寶曆六年五月八日、九日松雲公三十三回忌法會天徳院に於て執行、玉泉寺に於て兩日施行也。是まで男女共一升宛之處、今度五合宛に成、米高も被減。とありて、是より半減に成りたりと聞ゆ。また日數もむかしは三ヶ日なりしかど、此の時より兩日に成りたるにや。後々まで兩日にて、初日は男子、後日は女子にて、十五歳以下の者迄も賜はりたり。湯淺祇庸の北藩秘鑑に云ふ。御法事兩日於玉泉寺施行、現米百石、近例現米五十石之處、近年先例之通之米高に相成、非人乞食男女へ被下。初日は

男、後日は女与振分被下、則兩橋並升形橋与三ヶ所に揭示札相建、右米高之内玉泉寺其外非人頭等へ被下、夫々割合有之。施行米被下節相詰る役人、御持方頭二人、御横目一人、歩横目二人、足輕二十人、外小頭二人。とあり。

○泉野菅原神社

俗に玉泉寺の天満宮と呼べり。此の社は従前は今の玉泉寺の地にありて、玉泉寺は社の裏にあり。舊藩中は社寺共に藩の作事所にて、營繕方も行届き、且連歌料寄附ありて、毎月連歌興行ありしかど、慶藩の際、一時神像を卯辰山卯辰神社へ合祀し、神殿は玉泉寺へ賜はりけり。然るに明治五年氏子の請願に依つて、更に今の地を社地と定め、假に草社を造立し、神像を卯辰山より再び遷座なしたり。抑此の神社の來歴は、寛文七年の上梁文に如左載せたり。

光顯山玉泉寺天満宮由來

天満大自在天神者、其先出自天穗日命。而菅原美稱。依地爲姓矣。天慶之間、神託文字欲棲右近馬場。天曆年中移立祠于北野。此乃吾國廟祀之始也。已而國人所崇無處不祭、祭則靈感甚新。昔建武元申戊、畠山ト三相、攸於越中富

山。恭建菅原祭事矣。其後加越能三州使君利長公、讓國于令弟。退隱越之中州。公乃菅原之裔也矣。夫人永壽大姊、亦奉神甚勤。由是遷宮於高岡之城。賢夫婦同敬神威。實當慶長十六辛亥也。當社之起本良有故哉。又命利常公曰、菅原者吾家宗祖也。宜移于金城以鎮國家。元和三丁巳之秋、擇地於泉野。鳩工營構。不幾月而宮成矣。即十一月十五日、鎮座焉。謂六神爲相殿也。時淨神十二世其阿和尚、有神佛兼修之譽。命之兼別當職。住廟邊小寺。寬永六己巳年二月朔日。有旨重尋緣起。廣寺基。名改玉泉。令南水比丘爲關山第一祖。神事法樂月次連歌。菅原稱日域詩歌之神。故每月連歌以祈國祚。定于當時。同九年十一月念八日、神殿回祿。靈像如本。職主驚異遷于假殿。屢奏再造於國主。時國務甚繁而未果。至正保年中。黃門利常公神像一幅安于假殿。乃菅神之自畫而羽林光高公之平日所珍敬也。慶安二己丑年。命南桂爲住持兼神職。寬文二壬寅年八月廿四日。又勸請玉津嶋明神而添舊殿。同日宰相殿天女殿左右鎮座。亦老松紅梅二神安于相殿。寬文四甲辰年。勸請稻荷大明神於別社。雨寶堂。八幡大菩薩爲相殿也。今至于未之春納屋星霜。殿

階荒廢。山僧目觸心慘。不獲自己修造。謀重造於太守綱利公。乃使國工以鼎新焉。三社並鎮守不日而成。其材木必文木。欲堅而傳久遠。其宮不必鉅麗。欲嗣而易修復。太守之慮周而遠哉。

延寶二年の由來書に、

由來御尋ねに付而申上候。

玉泉院様御願に依て、元和三年之秋越中淨禪寺に被仰付、當御地にも天神御勸請被爲成、則淨禪寺前住別當所に有之、寬永元年迄御神事相勸申候。其以後其弟子看坊相詰罷在候。寬永五年之冬、遊行三十五代巡行仕致越年候節、利常様思召御座候に付、別當所を玉泉寺に御改被成候由御内意、御局之承に而遊行御請申上、住持申付候由承傳候。寬文六年二月より御祈禱料被遣、神事法樂之月次連歌御定被成候。唯今において無慢怠、毎日之御祈禱月次連歌相勸申候。下略。

延寶二年七月廿六日

玉泉寺判

篠原織部殿

永原左京殿